大丈夫よ！お母さん！

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

母の手

和室の方から、快い音が聞こえてきます。その音に促されながら、私は、音のほうに向かいます。部屋いっぱいに広げられた布地。布をかきわけるように、裁ち鋏（ばさ）みが進みます。シャキシャキ。可愛らしいプリント柄の布が裁たれていきます。新しい布の香りがします。

遠い記憶の中、母の手が、鮮やかに動いている。

子どもの頃の一番の喜びは、母の手作りの服を着ることでした。サッカー地のサラサラした感触のワンピース。ビロードの可愛い衿のおしゃれ着。朝顔の柄の浴衣。

母の手が縫った着物に手を通すと、いつも特別な気持ちがしました。「晴れがましい」という、そんな感覚が、全身に流れるのです。今よりもずっと貧しい時代でしたが、どこかおだやかな風が、どの家にも吹いていました。

時代は変わり、今では手作りの服や浴衣を着る子どもは少なくなりました。物の豊富な時代は、「作る」よりも「買うこと」が主流です。

子ども服売り場には、選べないほど多くの服があります。どれも可愛らしく、良い素材でできています。でも、何か心のすみに、置き忘れたものがあるような感覚に捉われるのです。

経済の高まりとともに日本人が失ったもの、それは、「親しみ」という感覚なのかもしれません。親しみは、愛情と似ています。「親しみ」が作る「時」が、昔はあり、その時の流れは、緩やかで、良い香りに満ちていました。

「手」というものが、今と比べて、生きていた時代でもあります。

母の手は、台所で、居間で、寝床で、惜しみなく活かされていました。子どもは寝床の中で、母が野菜を刻む音を聞きながら、朝がきたことを知りました。その音は「安心の音」だったのです。

つくろい物を縫う手。アイロンをかける手。漬物をする手。お弁当をつめる手。髪を撫でる手。母の手は、生活のためだけではなく、「思いやり」と繋がっていました。

父の手が、台風にそなえて雨戸を釘で打ちつけています。大きな自転車のハンドルを握る手。肩車された日の手の感触。庭木を切る手。父の手は、恐る恐るやってくる愛情のようでした。

今のお母さんたちは、お洒落で、センスもいいですね。「何を着るか」を考えることは、たのしいものです。でもそれが、自分の生活の地図の中の一点であるということを、忘れないようにしたいですね。そのような視野があれば、お洒落をするのは素敵なことです。時々、刺激に満ちた時代をそのまま映してしまった親たちを見かけます。

「自分の時間が欲しかった」。幼児二人を遺棄して死なせた若い母親の言葉です。「子育て」と「自分」を分けて感じる感覚が、そこにはあります。子どもを育てることは、「自分」の領域だと感じられない不幸が、そこから感じ取れるのです。

子どもの肌は柔らかく、触るといっそう情が深まります。もしその手の感覚が分からないのなら、それは母の手で優しくされた経験が薄いからだと思えるのです。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

執筆・講演活動のかたわら、様々な部門の文化事業を展開する「（株）クレアシオン」の代表。文章教室「スコーレ」画廊「キューブ　ブルー」「建築プロデュースすまい」「食彩いわさか」「ときわ薬局」など。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。